

出題のねらい

㊦は、従来現代文の論説文を出題しています。今回は、国語学者野村剛史の『日本語スタンダードの歴史』から出題しました。語り口は優しいのですが、現代の標準語が明治時代以降に成立したという通説を塗り替える、画期的・挑戦的な説を主な内容とする著書です。決して内容が易しいわけではありません。でも、だからといって、突飛なことをいきなり言い出すことはなく、筆者は順々に読者を自分の主張に引き込んでゆきます。ここではまず筆者の主張を、何度も立ち止まっては確認する、比較的解答しやすい設問を出しています。その上で、筆者の大きな問題意識を記述式で問い、その後筆者の主張を細部まで丁寧に読み取れたかを問う、選択肢問題を設けました。

㊧は、歌物語の『伊勢物語』と鴨長明の歌論書『無名抄』からの出題です。古典は苦手、さらに和歌はもっと苦手という人も多いと思います。しかし、日本文化の重要な部分を担うジャンルです。避けては親しみたいものです。平安時代の終わり頃に活躍した藤原俊成は、『千載和歌集』の撰者で、定家の父として有名ですが、晩年、正三位皇太后宮大夫で出家し、五条に住んでいたため、五条三位入道と呼ばれました。『伊勢物語』や『源氏物語』を歌人の教養と位置付けたことも重要です。自筆本の歌論書『古来風体抄』が冷泉家に残っていて話題になりました。定家の『小倉百人一首』に名前が見える俊恵の言葉を、鴨長明が記録しています。今回は、当時の和歌の評価の観点が窺える、興味深い箇所を採り上げました。



【解答】(50点)

|    |   |      |      |             |
|----|---|------|------|-------------|
| 問一 | a 随分                                      | b 整然 | c 順応 |             |
|    | d 残存                                      | e 同化 |      | (2点×5)      |
| 問二 | A オ                                       | B エ  | C ウ  |             |
|    | D イ                                       | E ア  |      | (2点×5)      |
| 問三 | エ   |      |      | (4点)        |
| 問四 | ア   |      |      | (4点)        |
| 問五 | 明治期には[～]という物語                             |      |      | (4点)        |
| 問六 | 電車の中でも人々の話に聞き耳を立てていた                      |      |      | (4点)        |
| 問七 | 田舎から出て来た小泉純一が、スムーズに東京詞をしゃべれたことの説明ができないから。 |      |      | (41文字) (6点) |
| 問八 | オ   |      |      | (4点)        |
| 問九 | オ   |      |      | (4点)        |

【解説】

問一 必ず出題している漢字の書き取り問題です。オープンキャンパスでも、漢字の勉強はある程度必要であるし効率的である、と言ってきました。随分の「随」位を例外として、画数の多い字は有りません。普段、比較的良好にする漢字だろうと思います。全体の正解率は六割弱。特に目についた誤答は「静然」「順能」でした。正確に書けないと、誤変換にも気が付きません。漢字の練習はしましょう。

問二 これも、よく出している空所補充の設問です。空所が5か所で補充する選択肢も5つ、その上補充する箇所は1頁強の間に集まっていますから、見直すことは容易でしょう。焦らずに一度全部当てはめた後、果たしてそれが最も適当かどうかを確認しましょう。アとオの位置を逆にした解答がかなり見られました。空欄Eはすぐ上の「物語」を否定する文脈の中で使われていますので、逆説のア「しかし」が最適です。

問三 「壁が高い」という慣用句の知識を問う、簡単な設問です。意外にも正解は半分ほどで、アの「敷居」を選んだ人が多くいました。それでは、上京者と言葉の間で、何やら上京者の方に非の有るような特別なニュアンスが加わってしまいます。

問四 小泉純一が東京詞を使っている情景を、頭に思い浮かべてもらいたいと思って出題しました。純一は一言一句、小説に出て来た文言を思い出して使っているのです。恐らくは時間のかかる、肩の凝る作業だったでしょう。問題用紙2頁に出てくる「尋常ならざるケース」です。ここまで思い至れば、正解は自ずからア「不慣れた外国語を使う」となります。この設問は、よくできていました。

問五 抜き出し問題です。少し後に、「～という物語である」と出てきますので、解答は容易なはずですが。「神話」について、ここで説明しておきましょう。論説文ではよく用いられる語です。一般的には正しいと思われていますが、その実、根拠のないこと、の意で小説の言語が「標準語」として流布したというのは全然ゼロではありませんが、(前問の繰り返しになりますが)尋常ならざることなのです。

問六 これも抜き出し問題です。小泉純一が取った行動を細かく分析しています。どの行動が傍線②に当たるのか、ここではしゃべるのではなく耳を傾けるのだと思えば、正解を導くことは容易です。実際、よくできていました。

## 一般入試／国語(前期)

問七 記述式の問題です。配点も高く、重要な設問です。抜き出しではないのですが、問題文もそれなりの長さがありますので、いきなり解答を考えるのは難しいでしょう。まずは、傍線中の言葉が、本文で説明されていないか探ることが大切です。傍線③冒頭に「この通念」とあります。「この」は前に書いた内容を受ける語です。「通念」とは何でしょう。本文のすぐ前に「通念では「標準語」は明治以降に『官(略)』によって指定され普及したもののよう考えられている」と書かれています。傍線③は簡単に言えば、この通念が間違っている、と言っているのです。その理由として、言語の「坩堝現象」が起こらず、首都言語への移行がスムーズであったことが述べられています。移行は( )の中で官の具体例として並べられた、官学や文部省・学校・もちろんNHKもできる以前からのことです。小泉純一の場合も、小説で標準語を覚えたというのが「官」にはそのような意思はなかった(あったのなら「尋常ならざるケース」にはならなかったでしょう)ので、上記の通念が誤りであることの一例となります。首都言語への移行がスムーズであったのはなぜか。小説によって普及したというのは、ごく稀な例。(前段)「官」の主導に拠るといのが通念だが間違い(ここが傍線③)で、その後の標準語は江戸期に既に形成されていた、と論旨は続いてゆきます。この流れが把握できていないと解答は難しいでしょう。正答率は論述式の常とは言え、低いものでした。

問八 正解はオなのですが、一つ一つ見て行きましょう。  
ア 問七と重なります。「坩堝現象」が起こらなかったのは「官」とは無関係です。  
イ 多分そうだったのでしょうが、日本語学史の論旨として最も適当なものではあり得ません。  
ウ この解説でも何度も書きました。これは「尋常ならざるケース」です。  
エ ここは他の選択肢と違い、間違っているのは一語、上の方の「古来」です。江戸期には形成されていたとはありますが、それ以前のことは、どこにも書かれていません。  
オ これが正解です。傍線③以下の問題文中の、混乱していると判定された記述を除くと、この文に成ります。他に設問の無い部分を丁寧に読む、というのはハードルが高かったようです。五つの選択肢の中で、最も選ばれなかったのがオでした。

問九 最後に文学史問題を出しました。文学史からも出題するということは、明記してあります。森鷗外・夏目漱石の代表作位は、せめてうろ覚えでもいいので(キチンと読んでいることが望ましいのは、言うまでも有りませんが)記憶していて欲しいと思います。正解はオの

三四郎で夏目漱石の作です。東京大学には今も三四郎池があります。



【現代語訳】

A

昔、男がいた。深草にいっしょに住んでいた女を、しだいに飽きる気持ちになったからであろうか、このような歌を詠んだ。

I 何年もの間、共に住んできたこの里を出てもし私がいなくなったら、この里は、深草の里という名以上にいっそう草深い野となってしまうだろうか。女が返歌する。

II ここが草深い野となったら、私は鶉となってここで鳴いていましょう。あなたは、せめてかりそめの気持ちでも、狩にいらっしゃらないこともないかと思えますので。と詠んだ女の歌に感じ入って、出て行こうと思う心がなくなったのであった。

B

俊恵がいうことには、「五条三位入道俊成卿のお宅に、うかがった機会に、『お歌の中では、どのお作を、優れているとお思いですか。人は、ほかでいろいろと決めておりますが、それに従うことはできません。たしかに、御本人からお伺いいたしましょう』と申し上げたところ、

『III 夕方になると野辺の秋風が身にしみて、鶉が鳴くのが聞こえる、この深草の里では。

この歌をこの身にとっての代表歌と思っています』と言われたので、この俊恵がまた、『世間で一様に人が申しておりますことでは、

IV 桜花の咲くさまを面影として先立たせて、これまで幾重、峰にかかる白雲を越えてきたことだろうか。

この歌を優れているように申しておりますことは、どうお考えですか』と申し上げた。すると、『さあ、よそではそのように決めているのでしょうか、知りません。やはり、私自身は前の歌には比較して論じることではできません』ということでした』と語って、このことについて、内々に申したことには、「あの歌は、『身にしみて』という第三句がひどく残念に思われるのだ。これほどになった歌は、雰囲気さをさらりと表現して、ただイメージとして、さぞ身にしみただろうよと聞く人に思わせるのが、おくゆかしくもやさしくも思われるのです。たいそうくわしく表現して、歌の眼目とすべき箇所を、はっきりと表現したので、ひどく底が浅くなってしまったのだ』と語った。そのついでに、「私の歌の中では、

V 吉野の山が曇り、雪が降ると、麓の里はしぐれがちなことだ。

この歌を、あの俊成卿のいわれた自讃の歌にしようと思っております。もし後の世に私の代表歌は何か、はっきりしないという人でもいたならば、『このように言っていた』と語ってください』と言った。

【解答】(50点)

|    |                                     |          |        |
|----|-------------------------------------|----------|--------|
| 問一 | イ                                   |          | (4点)   |
| 問二 | I ウ                                 | III エ    | (4点×2) |
| 問三 | (掛詞) かり                             | (漢字) 狩・仮 | (2点×3) |
| 問四 | ウ                                   |          | (4点)   |
| 問五 | 歌の詮とすべき節を、さはさはと言ひ表したれば(22字)         |          | (6点)   |
| 問六 | 「身にしみて」の主語は鶉なのに、五条三位入道自身と誤解した。(30字) |          | (10点)  |
| 問七 | イ                                   |          | (4点)   |
| 問八 | 身にとりてのおもて歌                          |          | (4点)   |
| 問九 | 方丈記                                 |          | (4点)   |

【解説】

問一 文章中に用いられている助動詞「けむ」の意味が、過去推量か、それとも過去の原因推量かを問うています。aは、男が長年一緒に暮らしてきた女に「もし自分が出て行ったら」というIの歌を詠んだ理由を、物語の語り手が推量している箇所。bは、IIIの歌の場面、夕方の秋風が身にしみただろう、と歌を読む者に推量させるのがよいのだ、と俊恵が語る箇所。文脈を丁寧に追って読み進めましょう。正答率は五割程度。

問二 語句の解釈。これも、助動詞の知識の定着度をみています。Iの「野とやなりなむ」の「な」は強意(完了)の助動詞「ぬ」の未然形。「む」は推量の助動詞。きっと…だろう、の意。IIIの「鳴くなり」の「なり」は、聴覚による推量の助動詞。聞こえてくる声で鶉が鳴いていると推量する。…のように見える、という意の視覚による推量の助動詞「めり」とセットで覚えておきましょう。これも正答率五割程度。

問三 和歌の知識として掛詞は、「松」と「待つ」など、代表的なものは知っておくことが大切です。鶉が鳴いている野だから「狩」にやって来ることが先ずは気が付くでしょう。「かりにだに」と、せめて…だけでも、という最小限の意を表す副助詞が付いているので、ほんとうは愛情をもって訪ねて来てほしいのだが、せめて仮初めの気持ちであってもかまわないので…と「仮」が掛けられていることに気付いてほしいところです。「一文字の漢字」という答える際の指示も見落とさないように注意しましょう。

問四 IVの歌で、峰を「越えて来た」のか、「越えて来ない」のか、を考えることになります。和歌のレトリック(修辞法)で「見立て」というものがあります。「花」で桜を表すことはよく知られていますが、昔の桜は

ソメイヨシノのような桜色ではなく、山桜で花の色は白かったため、「雪」や「白雲」に喩えられました。日本の美意識のなかで、春の桜と秋の紅葉は代表的なものです。その桜と紅葉が描かれた文様は「雲錦文様」と呼ばれます。桜を雲に、紅葉を錦に見立てるのです。Ⅳの歌では、「峰の白雲」を見て、山桜が咲いたのだと思って、山桜の美しい「面影」を求めて「幾重」の峰を越えて来た、というのです。「ぬ」は、打消ではなく、完了の助動詞なので「来」は連用形の「き」で読むのが正しいということになります。

問五 俊恵が「五条三位入道の自讃歌を低く評価する理由をどう述べているか」と問うています。「低く評価する」表現は「むげに、こと浅くなりぬるなり」です。その箇所の前に、理由を表す「已然形+ば」があります。「二十五字以内で抜き出して答えよ」とあるので、「歌の詮とすべき節を、さはさはと言ひ表したれば」が抜き出せるはずです。

問六 難問です。ただし、俊恵が「かの歌は、『身にしみて』といふ腰の句のいみじう無念に覚ゆるなり」と言って「難ずる」点を踏まえ、さらに「主語」という語を用いて、というヒントに注目すれば、誰が「身にしみ」るのかというところに「誤解」があるのだろう、と推測できるでしょう。俊恵の言葉からは、五条三位入道自身が「夕されば野辺の秋風身にしみて」いると、俊恵が理解していることが読み取れます。しかし、『伊勢物語』を読むと、「鶉」は、単なる鶉ではなく、男に飽きられて、男が深草の里を出て行ってしまった後、「鶉となりて鳴きをらむ」と詠んだ女の化身なのです。その点に気が付けば、身にしみる「秋風」の「秋」にも「飽き」が響いていることが知られます。五条三位入道は、『伊勢物語』の世界を背景にこの歌を詠んだのです。注に記されている「幽玄という美的理念を確立した」歌だったのです。「身にとりてのおもて歌」（自分の代表歌）とまでいう所以です。残念ながら、俊恵はそれに気づけませんでした。『伊勢物語』第八十二段「渚の院」を踏まえた「またやみむかたののみの桜がり花の雪ちる春のあけぼの」（新古今和歌集・春下・114）も有名です。

問七 俊恵の歌の特徴を問うています。俊恵の言葉が理解できれば、彼が「主観的」な表現を歌から排除しようとしていたことが知られます。「ふさわしくないもの」をいう指示を見落として、「ふさわしいもの」を選んでしまった人もあったのか、正解できなかった人が多く出ました。

問八 ここまでの解説で「かのたぐひ」を五条三位入道の言葉から、しかも「十字で」と探すのは困難ではないはずですね。

問九 文学史の問題。鴨長明の著作としては、随筆の『方丈記』、歌論書の『無名抄』、仏教説話集の『発心集』を覚えておきましょう。「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」という冒頭文は暗誦しておきたいほど有名です。漢字を間違えた人がいたのは残念です。